



青森県高等学校PTA連合会事務局

〒030-0113 青森市第二問屋町4丁目11-6 計量検定グループ庁舎内

TEL 017-757-8586 FAX 017-757-8587

E-mail: akp017si@galaxy.ocn.ne.jp

97号

2022.12.14



青森県高P連調査広報委員会

題字：八戸高等学校 諏訪内博彦



←「高P連公式HP」QRコードからアクセス!!  
<http://www.aomori-koupren.com/>

## 青森県高P連合同研修会 「南極観測隊への挑戦」

令和4年9月28日、青森県総合社会教育センターにおきまして、健全育成委員会・研修委員会合同研修会が開催されました。

新型コロナウイルス感染症の影響により3年振りとなる合同研修会となりました。未だに収束の気配が見えない中ではありますが、万全の感染対策を講じての開催にあたりましては、多数の方々にご参加いただき心から感謝申し上げます。

今回の研修会は、第57次南極地域観測隊の調理隊員として尽力なされた渡貫淳子氏を講師に迎え「南極観測隊への挑戦」と題してご講演をいただきました。

講演が始まり、青森県出身でおられる渡貫氏がどのようにして南極調理隊員を目指し、そして実現されたか、冒頭から大変興味深く聞き入っていました。

南極、昭和基地、そこに辿り着くまでのさまざまな経緯の中に、同じ女性として感銘を受けるお話がたくさんありました。

まず、結婚、出産を経ての挑戦。南極に興味をお持ちになられたきっかけが、第45次南

極越冬隊に参加なされた女性の新聞記事を読み、それから「南極料理人」という映画をご覧になられた事、そこで南極で料理を作って食べさせたいという一心で長い時間をかけ試験に挑戦し続け、見事に合格されたとのことですが、この行動力には頭が下がる思いでした。

「夢を叶えるのに年齢なんて関係ない」という講師の言葉が今でも心に残っています。この言葉をお聞きして、私は何事も諦めず、ゆっくりでも一歩ずつ歩み続ければ不可能な事と思っている事でも可能になること。何事も諦めたらそこで終わってしまうこと。夢や目標の大小に拘らず自分の信念を貫き通すことのすばらしさを学ばせていただきました。これから社会という大きな海原に船出する子供達に強く伝えたい貴重な講演だったと思います。その他にも、ローソンで商品化された「悪魔のおにぎり」のお話や野菜の保存方法、野菜の水耕栽培のお話、氷山での流しそうめんなど、ここに書ききれないほど豊富な話題でとても楽しく聴くことができました。

た。予定された時間は本当にあつという間に過ぎた感じでした。

講演の終わりに紹介して下さった南極の空に輝くオーロラの映像は圧巻の美しさで今でも鮮明に思い出されます。

最後になりますが、このような素敵なお時間を過ごさせていただけたのも、渡貫淳子氏をはじめ、関係者の皆様、ご参加いただきました皆様のおかげです。誠にありがとうございました。

(研修委員長 笠井 理咲子)



## 青森県高P連広報紙づくり研修会

### 「実践『まわしよみ新聞』で学ぶ紙面づくりの「ミ」」

6月28日、「広報紙づくり研修会」が青森県総合社会教育センターで開催されました。学校と家庭を結ぶ広報紙について研修することにより、編集技量などを向上させながらPTA活動の活性化に役立てるという開催趣旨のもと県内各地から41名が参加しました。研修別会場に設けられた前年度の各校広報紙が展示されたスペースには、開会前から多くの参加者が集まり熱心に閲覧していました。

その後に、東奥日報社編集局整理部整理委員 三上朋徳氏から「実践『まわしよみ新聞』で学ぶ紙面づくりのコツ」というテーマにて研修を受けました。

今回研修を受講する参加者のほとんどが「まわしよみ新聞」って何？という反応でしたが、進行が進むうちに初対面の参加者同士が楽しく談笑する声があちこちから聞こえてきました。研修は講師の方から、8つのグループ毎に地元新聞の他、四国や九州地区の新聞などを配布



いただき、その新聞の中から自分が気になった記事を2〜3個ピックアップしグループみんなでなぜ自分がその記事をピックアップしたか紹介し合いました。その中からトップ記事をどれにするかみんなで話し合い決めていくのですが、参加者の選ぶ視点の違いを知ることでも大きな学びとなりました。終了後は来年も同じく「まわしよみ新聞」での研修をやってほしいとの声から参加者から多く聞かれるほどとても充実した研修会となりました。

(調査広報委員長 下町 三三夫)

## 青森県高P連進路指導研修会

### 「変化の激しい時代において、人の育ちに必要なものは何か」

10月28日に、青森県総合社会教育センターで開催されました「令和4年度地域資源を活用したキャリア教育推進フォーラム」に参加しました。

和嶋県教育長の挨拶の後、県内各校が実施しているインターンシップにご協力いただいている企業11社に「あおもりキャリア教育応援企業表彰」が行われました。

引き続き青森県企画政策部地域活力振興課より、「若者から『選ばれる青森』をめざして『青森県の課題と『YES! AOMORI』』と題して情報提供がありました。そこで私も初めて知ったのですが、青森県の高校生の県内就職率が、58・7%で4年連続全国最下位だそうです。全国平均は81・9%で高い県では95・0%でした。青森県の高校生が県外に就職する主な理由としては、「県外で働きたい」「自宅を離れて生活したい」といったことだそうです。

青森県は若者の定着を図るために、若者への直接的なアプローチ、保護者・教員など大人へのアプローチをしているようです。私たちも普段から子どもと青森県の魅力や地方の価値、将来について話し合わなければならぬと実感しました。

最後に株式会社教育と探求社代表取締役社長宮地勘司氏から「変化の激しい時代において、人の育ちに必要なのは何か」と



講演する宮地勘司氏

今回の研修に参加して、子供たちは我々保護者の他にも学校、地域、企業、支援団体等多くの方々にお世話になっていることを改めて感じました。感謝です。

(進路対策委員長 佐々木 長 栄)



# 地区協議会だより

## 三八地区協議会

三八地区協議会 会長 山田 知

新型コロナウイルス感染症禍で社会経済活動が幾度となく制限され、PTA活動も対面での活動を控えざるをえない状況にありましたが、三八地区協議会では本年を一步踏み出す年にしていきたいとの考えのもと、感染対策を講じて9月8日に八戸プラザホテルで研修委員会、健全育成委員会合同研修会を開催しました。

研修会は、日本アンガーマネジメント協会アンガーマネジメントファシリテーターの津島弘美さんに「怒りの仕組みや感情のコントロール法」と題してご講演頂きました。

私たちは暮らしの中で心にゆとりがなくなったり、ストレスから不安や不満が蓄積したり、また子どもと冷静に話す場面などで感情的になってしまふ事もあります。講演では、怒らせるものの正体は「自分の理想とするものと現実とのギャップ」、こうある「べき」といった思い込みがあり、その意味付けを変える事で感情を抑えられるようになる。そして、怒りが生まれるメカニズムを火をつけるライター

に例え、マイナスとなる感情を解消する事、怒りを生み出す思い込みを減らす事で怒りを抑えられるという内容でした。講演を拝聴し、これまでを振り返り、講演で学んだ事を生活や仕事に生かしていきたいと思いました。学びの多い実りある研修の機会となりました。



## 西北地区協議会

西北地区協議会 会長 須藤 久輝

令和4年10月6日(木) プラザマリユウ五所川原を会場にて、2年ぶりに西北地区協議会研修会を開催しました。まだまだコロナ禍ではありますが、マスク着用はもちろんのこと、検温、手指消毒、座席の間にアクリル板を設けるなど、できる範囲の感染症対策を行い、総勢42名の参加の元、講師には元五所川原工業高校校長の三上浩氏を招き、「子どもたちの力を発揮させるために」と題し、講演していただきました。

三上氏は、38年間の教員生活で、国語科教諭として教科指導はもちろんのこと、子どもたちの育成と指導に携わるとともに、教頭・校長として学校運営・経営に尽力されてきました。また、30年に渡り卓球部の顧問を勤め、子どもたちと共に汗をかき、涙を流し部活動を通して「人づくり」をしてきました。講演の中で印象に残っている言葉を紹介します。①「なぜか成る」やれば必ずできる。やらなければできないわけがない。できないのはその人がやらないからだ。②「無限の可能」今の子どもたちはすぐに無理という諦めた時点で可能性はゼロになる。諦めずに努力を続ければ可能性は高まる。③「凡事徹底」当たり前のことが当たり前にできることで当たり前の結果になる。そして最後に、「sodateru」の「s」とをれば「odateru」となる。「育てる」は「おだてる」から始まる。

これまでもこれからも我々保護者、教職員がこれらの言葉を胸に抱き、子どもたちに接しながら伝えながら、可能性に満ちた「人づくり」をしていきたいと思える研修会となりました。この研修会を計画準備していただいた五所川原工業・工科高校さん、講演していただいた三上氏に感謝申し上げます。また、参加していただいた皆さんにお礼申し上げます。ありがとうございました。



## 下北むつ地区協議会

下北むつ地区協議会 会長 佐藤 俊介

11月2日(水) 下北文化会館で、下北むつ地区協議会第1回研修会が開催されました。今回は「地域の防災を考える」をテーマに、対面の研修としては数年ぶりに行われました。

研修では今年8月に実施された「むつ市内4校合同・震災から学ぶプロジェクト」に参加した生徒から報告がありました。田名部高校は震災遺構の「大川小学校」で、語り部の方から伺った、「情報、時間、避難場所、避難手段のすべてがそろった中で、なぜ74名もの児童が犠牲になったのか?」と、そこから考えた「防災教育の大切さ」を伝えました。大湊高校からは多様な被災者を想定した「イスラム教徒やベジタリアンの非常食」と、避難所で使う「災害時のピクトグラム」についての研究、むつ工業高校からは「避難所運営の難しさ」と非常食について、「むつ養護学校からは、「震災を語り継ぐ大切さと防災教育の重要性」について感想が話されました。

その後、災害時に何を持って逃げるべきなのかを考えるワークショップが行われました。イラストのカバンに詰め込む荷物(イラスト)を考えると、東日本大震災当時の津波到達時間内に準備することは難しく、日ごろからの準備の大切さを感じました。最後にむつ市から防災食(非常食のごはんとおかず)が提供され、「防災」を考える貴重な時間となりました。

文責…大湊高等学校  
渉外部 南澤 英夫



# 歴史に幕

「永永無窮  
いつまでも心のなかに」

金木高等学校

本校は昭和27年、金木町外五ヶ町村で学校組合を設立し、組合立青森県金木高等学校定時制の課程として誕生しました。その後、昭和28年には相内分校、翌29年には小泊分校が設置され、昭和37年4月、県立に移管し全日制の県立学



生徒の奴踊り披露

校として家政科も設置され、現在の青森県立金木高等学校となりました。

開校当初から、この地域の高校教育の拠点としてその役割を担い、「誠実 進取 建設」の校訓の下、これまで8,265名の卒業生が巣立ち、郷土のみならず各界各層で有為な人材として幅広く活躍されています。

本校は長年にわたって野外学習や太宰学習など、「地域」「自然」「文化」と深く結びついた魅力ある教育活動を推進し、地域とともにある学校、地域に根差した学校として使命を果して参りました。

部活動では、特にウエイトリフティング部の活躍が著しく、県高校総体8度の優勝やインターハイ優勝を成し遂げ、「金木高校に重量挙げあり」と高く称賛されました。他にもスキー部や三味線部など、多くの部活動で全国から注目される活躍がありました。

今年度は、「永永無窮いつまでも心のなかに」をスローガンに掲げ、本校最後の卒業生となる17名の生徒たちは、清掃ボランティア

や伝統芸能である嘉瀬の奴踊り・津軽三味線の披露など、伝統の継承と地域への感謝の気持ちを精一杯届けてくれました。また、同じく閉校する板柳高校、鶴田高校や北海道南幌高校と交流する機会にも恵まれ、生徒たちは同窓生との縦のつながり、同世代の高校生との横のつながり、そして地域とのつながりの深さを実感し、金木高校への思い、地域への思いを一層確かなものにできたと思います。

去る令和4年10月1日に関係者約130名の出席を賜り閉校式典を挙行し、多くの方々に惜しまれながら終えることができました。あらためて金木高校の歴史の深さと閉校する寂しさを感じた次第です。

令和5年3月31日に70年の歴史に幕を閉じますが、これまで本校を御支援いただきました貴会をはじめ、すべての関係各位に対し、衷心より御礼を申し上げます。

(校長 大瀬 幸治)

## これまでの

## 「軌跡」に感謝

六戸高等学校

本校は昭和56年に開校し、令和5年3月に42年間の歴史に幕を下ろします。開校以来、多くの方々に支えられ、地域に密着した高校としてここまで教育活動を行うことができ、また、去る10月22日に



『メイブルの森』植樹祭の一場面

り、地域に定着した取り組みとして理解されています。

しかし、近年は新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの学校行事を中止、縮小せざるを得ない状況が続きました。学年によっては修学旅行、六高祭、球技大会等、ほとんどの学校行事が中止となり、ボランティアの募集もほぼゼロというとても寂しい時期もありました。そのような状況でも進めることができた活動があります。平成31年度から取り組みを始めた「さつき沼ビオトーププロジェクト」です。本校に隣接している「館野公園」を活用した自然環境を調査・復元する活動です。主に総合的な探究の時間を活用し、これまでに多くの成果を残しております。絶滅危惧種の発見、カブトムシ観察会、冬鳥観察会、遊歩道の設置、「メイブルの森」植樹祭、メイブルシロップの商品化などが大きな成果です。

今年度で本校は閉校となりますが、ビオトープ活動は新たに立ち上げたNPO法人や地域に継承されます。最後に、これまで本校を支えていただいたすべての方々に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

(教頭 奈良岡 隆樹)



## 「歴史と

## 思い出永遠に」

木造高等学校深浦校舎

「深浦町に高等学校を」という町民の念願が叶い、昭和23年7月に青森県町立鯉ヶ沢高等学校定時制深浦分校として、深浦中学校の教室を使用して本校の歴史がはじまりました。昭和32年には、深浦町民の悲願であった町立青森県深浦高等学校として独立し、昭和45年に青森県立深浦高等学校として新たなスタートを切りましたが、急激な人口減少に伴い平成19年に青森県立木造高等学校深浦校舎と校名を改称し、現在の在校生14名が最後の卒業生となり、74年間の学校に幕を下ろすことになりました。

これまで4, 452名の卒業生を輩出し、昭和50年には1学年181名、昭和52年には在籍生徒数が最大の499名にまで増え、深浦町民の期待を胸に地域と連携しながら、地域に愛された学校として支えられてきました。



深浦町に高等学校が誕生してからの74年の間には、青森県高等学校総合体育大会において団体戦では軟式野球2回、空手道2回優勝をするなど一人ひとりが文武両道をめざし、部活動がとて盛んでした。その中で、平成10年夏の全国高等学校野球選手権大会青森大会において、野球部が東奥義塾高等学校と対戦し、0対122で歴史的な大敗を喫しましたが、両校が最後まで試合を諦めずに全力で最後まで試合に臨んだことに、全国から励ましや感動したというメッセージをいただき、そのことが神

奈川県の小学校の道徳教材に取り上げられ、当時話題となりました。

この学び舎は、本校卒業生、本校を支えてくださった関係者の皆様の御支援・御協力があり、74年間の歴史を重ねることができました。この学び舎で育った4, 452名は、その想いや絆を胸に、くじけることなく、前を向いて歩き続けて欲しいと思います。

この学び舎は、いつもここにある、青森県町立鯉ヶ沢高等学校定時制課程深浦分校から木造高等学校深浦校舎までの歴史と想い出も永遠です。

(校長 大瀬 雅 生)

## 「地域とともに

## 歩んだ71年」

鶴田高等学校

本校は、昭和26年10月1日に設立された県立板柳高校六郷分校と、翌年設立された県立五所川原高校水元分校が起源になります。その後、六郷分校と水元分校が統合され、昭和49年に独立昇格し、現在の鶴田高校になりました。71年の歴史を刻み、これまでに5, 283名の卒業生を社会に送り出してきました。昭和50年代には約500名の生徒が在籍した時期もありましたが、平成に入り生徒数は減少に転じ、時代の趨勢には抗

えず令和5年3月末日をもって、幕を閉じることとなりました。

先輩諸氏の御尽力によって整備された恵まれた教育環境の中で、鶴田高校は地域とともに着実な教育活動を行ってきました。平成4年に国際教養コースが発足し、鶴田町の多大な御支援もあって米国のフッドリバーバレー高校と姉妹校になり、これまでに25回の親善訪問・海外研修旅行を実施しています。また、鶴田祭でのねぶた運行や鶴高ソーランなど、地域と連携した多様な教育活動がなされてきました。近年では地元の活性化に寄与する「鶴(高)の恩返しプロジェクト」に取り組み、メイン企画である「鶴の舞橋写真コンテスト」とそのカレンダー制作は好評を博してきました。

現在の3年生は、毎年人数が減っていき、さらにはコロナ禍の中で、様々な制約や影響を受けてきた生徒たちです。ただ、そのような環境にあっても、少人数だからこそできることを考え、多様な活動に取り組んできました。2度の延期の末に実施した修学旅行。閉校する近隣3校(本校・金木高・板柳高)の合同運動会と合同発表会。他にも、閉校に向けて取り組んだ弥

生画やMY箸の制作など、どれも鶴田高校だからできたことであり、将来に向けての貴重な経験・財産になったものと信じています。

最後に、今日まで物心両面で本校の教育活動を支えてくださったPTAはじめ関係団体の皆様、これまで鶴田高校を応援しともに歩んでこられた地域の皆様、御縁をいただいたすべての皆様、心より感謝申し上げます。

(校長 中山 康 夫)



鶴の舞橋をバックに



## 「篤き友拠る」

十和田西高等学校

本校は、昭和29年三本木農業高等学校十和田分校農業科定時制の課程夜間部として始まりました。昭和55年に、三本木高等学校十和田分校全日制の課程普通科となりました。平成元年4月1日青森県立十和田西高等学校として普通科2学級で開校しました。平成10年には、県内唯一の

「観光科」が設置され、2つの学科が設置される高校となりました。

十和田西高等学校の活動は、観光に関する勉強を組み込むことによって地域との連携を深め多方面に浸透していきました。十和田奥入瀬ボランティアガイドの実施、十和田バラ焼きゼミナールの協力によるB-1グランプリへの参加と十和田湖・奥入瀬溪流や十和田市の紹介などの情報発信を県内や全国に行ってきました。

本校は生徒数が少ない中でも、部活動に熱心に取り組む生徒によって、「青森県高等



桜の木の下で

学校運動部活動奨励賞」を陸上競技部が平成16年に、空手道部が平成22年に受賞しました。

本校は、少年消防クラブの活動をはじめとし、学校安全に関する教育にも力を注ぎ、令和3年には「安全教育の推進及び安全思想の普及」により「安全功労者内閣総理大臣表彰」を受賞しました。また、全国学校体育研究優良校としても表彰されました。これらの結果については開校以来、地域に支えられ、地域のために行動してきた本校が評価されたものと感じて

います。

開校から34年間、2,300名を超える卒業生を送り出した十和田西高等学校も令和5年3月31日にその歴史に幕を閉じます。

終わりに、十和田西高等学校を支えて育てていただいた「父母と教師の会」の皆様をはじめ、本校に関係された方々に対し、心から御礼申し上げます。これまでのご指導、ご支援、誠にありがとうございました。

(校長 山口 吉彦)

## 「地域の皆様に 支えられ85年」

板柳高等学校

本校は、昭和13年に青森県板柳町立実家高等女学校として開校しました。昭和29年に県立移管となつて青森県立板柳高等学校と改称し、昭和53年に現在の地へ移転しました。開校以来、校訓「誠実・勤勉・礼儀」のもと、一貫して地域に貢献する人材の育成に努め、これまで15,000名を超える卒業生を社会に送り出して参りました。

本校の歴史で特筆すべきは、部活動における生徒の活躍です。バレーボール部、バスケットボール部、卓球部、軟式野球部、ソフトボール部、水泳部、陸上部等、数

多くの部活動が県高等学校総合体育大会で優勝し、全国大会に出場するという輝かしい結果を残してきました。

現在本校では、在籍している3年生が自分達で決めた、最後の生徒会のスローガン「喝采」高め合おう輝く個性」に、「思いやりと笑顔を忘れずに、互いに認め合い、受け入れながら、みんな高め合っていきたい」という思いを込め、素直で純朴な生徒と愛情溢れる教職員が、板柳の伝統を受け継ぎながら日々の教育活動に邁進しているところ

特に今年度は、来年度同じく五所川原工科高校に統合される鶴田高校と金木高校との交流に力を入れ、6月には五所川原つがる克雪ドームで開催された3校合同運動会で共に汗を流し、10月に五所川原オルテンシアで行われた3校合同発表会では、生徒が日常の学校生活や個人で身に付けた技能やパフォーマンスをお互いに発表し合い、生徒同士の連帯感を高め合いました。

また、平成17年から板柳祭の伝統として引き継がれ、校舎壁に飾られた最後の巨大ねぶ



ねぶた鏡絵をバックに

た鏡絵は、板柳町の小・中学生と協働して製作し、弘大囃子組によるねぶた囃子演奏や、打ち上げ花火とともに、多くの町民に楽しんでいただくことができました。

このように惜しまれながらも、本校は、令和5年3月末をもって、85年の長い歴史に幕を下ろすこととなりました。これまで板柳高校を支えていただいた父母教師の会をはじめ、本校に携わっていただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

(校長 川野 優子)



## 文部科学大臣表彰受賞の喜び

# 「PTAを身近に」家庭と学校との 協力体制構築を目指して」

五所川原農林高等学校校父母と教師の会 会長 佐々木 真

この度、五所川原農林高等学校校父母と教師の会が優良PTA文部科学大臣表彰を受賞いたしました。本会では平成7年に1度受賞しており、実に27年ぶり2回目となりました。今年度、創立百二十周年を迎えた本校にとつては節目での受賞となり、喜びもひとしおです。

さて、今回PTA活動が評価され、受賞させていただいたわけですが、昨今は新型コロナウイルスの影響からPTA活動をどのように行っていくべきかについて、大変苦慮しております。各校におかれましても、同様ではないかと推察いたします。

そのような状況下で「PTAを身近に」家庭と学校との協力体制構築を目指して」のスローガンのもと本校で実践した活動を1つ紹介いたします。

本校では昨年度から「五農PTA来校スタンプカード」を発行しております。これは、PTA活動の活性化を図るために、PTA行事をポイント対象として設定した企画で、会員が来校しやすい雰囲気醸成を目的に取り組みました。幸い本校には、生徒が農業実習で収穫した農産物や製造した加工品が多数あります。それらを景品として、行事に参加し、スタンプが3個または5個たまったら時点で加工品のプレ

ゼントをしました。この企画は、楽しみながらPTA活動に参加する気運づくりの一助ともなり、来校する会員数が増えております。このような活動が一定の評価を受け、今回の受賞に繋がったかと感じております。

さて、PTAは子どもたちの成長を支える学校における最大のボランティア組織、これが私の思うPTAの立ち位置です。ボランティアですので、自分たちのできる範囲で活動に参加していただくことが大切です。また、参加して良かったと思える楽しさが必要不可欠です。これからも、先生方と保護者の皆様がコミュニケーションを取れる参加しやすい行事の企画・運営を目指します。

最後に、PTA活動が学校と家庭の信頼関係を構築するための架け橋となるよう、この受賞を一つの通過点として捉え、子どもたちのために、先生方と保護者のつながりを大切にPTA活動に取り組みたいと思います。



10月15日(土)・16日(日)「第32回 全国産業教育フェア青森大会2022」が新青森県総合運動公園マエダアリーナをメイン会場に行われました。

このイベントは、全国の専門高校生が集い、日頃の学習や活動の成果を総合的に発表する場で、キャッチコピー「響かせよう産業の音色」縄文の風吹く青森で」のもと、生徒による実践発表、作品展示等様々な催事がありました。

## 「さんフェア青森2022」

会場は、水産エリア、農業エリアなどに分かれており、全国の水産高校や農業高校の生徒さんが商品開発・製造した缶詰やドレッシング・スイーツなどの販売があり、買って頂くためにはどうすればいいか等、販売方法も工夫されていて、即完売になっていた商品もありました。私もいくつか、親心でたくさん購入してしまいました。

総合学科エリアでは、青森県内各地から、「地元の魅力発信・ツアープログラム紹介」として、事前に制作した映像と共に、現地と中継を繋ぎ、それぞれの地域の魅力を発信していました。私は、青森中央高校の生徒が、青森市の縄文遺跡「小牧野遺跡」から中継をつないでいるのを拝見しましたが、きちんと自分たちの言葉でまとめ

られており、短い時間でわかりやすく説明されていました。学びを通して、地元の宝を自分たちのものと考えられることは大切なことだと感じました。

コロナ禍において、発表の場が少なくなっている中で、今回参加した子供たちは、全国の同年代の子との交流や、発表を通じて学べるのがたくさんあったと思います。大人もいろんなことを学ばせていただきました。

最後に、拝見させていただいて気づいたことは、子供たちは状況がどうであれ、精いっぱい自分たちにできることを一生懸命やっていることに感じました。このような貴重な経験が、子供たちの進路に、大きく生かされてくれることを願っております。

(調査広報委員 神 康子)



## 編集後記

コロナ禍において事務局での感染対策をしっかりとした会議場環境づくりのお陰で参加者の安心感も高まり、今年度は広報紙づくり研修会、合同研修会、進路指導研修会と3つの研修会を開催できました。そのため広報紙づくりにおいて、取り上げたい記事も多くなり広報委員会での編集会議では悩むこともなくスピーディに紙面構成が決まり大変助かりました。広報委員の皆さんには、毎回遠方から集まっていた下さりありがとうございます。また短期間にて原稿書きにご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。この1年間広報委員長として「広報紙つながり」に携わることができたことでたくさんの学校関係者と交流できました。心から感謝申し上げます。

(調査広報委員長 下 町 三三夫)



## 令和4年度 上半期事業費支出内訳

令和4年4月1日～令和4年9月30日

### ◆ 事業費 4,939,034円 (予算額 9,901,000円)

|                                |                   |            |
|--------------------------------|-------------------|------------|
| <b>1 学校安全普及充実事業費</b>           | <b>450,000円</b>   |            |
| (1) 8月9日 助成金支出 (地区協議会 安全教育活動費) |                   | 150,000円   |
| (2) 8月9日 助成金支出 (青森県高等学校体育連盟)   |                   | 100,000円   |
| (3) 8月9日 助成金支出 (青森県高等学校文化連盟)   |                   | 100,000円   |
| (4) 8月9日 助成金支出 (青森県高P連安全教育活動費) |                   | 100,000円   |
| <b>2 共済金等給付事業費</b>             | <b>4,420,394円</b> |            |
| (1) 死亡共済金                      | 0件                | 0円         |
| (2) 後遺障害共済金                    | 2件                | 2,657,000円 |
| (3) 負傷共済金                      | 87件               | 1,713,394円 |
| (4) 香 料                        | 1件                | 50,000円    |
| (前年度 2件)                       |                   |            |
| <b>3 その他事業費</b>                | <b>68,640円</b>    |            |
| (1) 7月21日 安全互助会だより58号          |                   | 68,640円    |

### ◎ 青森県高等学校安全互助会加入生徒数

全日制25,171名 定時制・特別支援学校958名 通信制349名 総数 26,478名

共済掛金は来年度も同じです。  
全日制(専攻科を含む) 600円  
定時制・特別支援学校 250円  
通信制 100円

## 助成金事業

## 第43回県高総文祭青少年赤十字部門大会

第43回青森県高等学校総合文化祭青少年赤十字部門大会が10月22日(土)、「To Live with COVID-19」コロナ禍に向き合う今、私達にできること」のテーマのもと、東奥義塾高等学校を会場に行われました。青少年赤十字部門はコロナウイルス感染症の影響で第41回と第42回が開催中止となり、3年ぶりの大会でした。

大会では、各校の日頃の活動の成果を伝える「体験発表」・「壁新聞コンテスト」と共に、「救急法実技コンクール」が行われます。このコンクールは、私たちにとって特別な存在です。というのも、人道の実現を目指す青少年赤十字活動は、本来「争う」ことに馴染みません。しかし、高文連加盟には競技性が必要であったため、当時の顧問等が全国に先駆けて作り上げたのが、この「救急法実技コンクール」なのです。おかげで、平成元年に11番目の専門部として加盟が実現し、現在へと続いています。

今年度の「救急法実技コンクール」には、8校9チームが出場しました。1チーム4～5名で、AEDを用いた一次救命処置、三角巾を用いた包帯法を競いました。事前に日本赤十字社青森県支部所属の救急法指導員および救急法指導講師による講習会を受講します。見た目以上に厳しい練習とチームワークが必要で、運動部に似たところがあります。出場した高校生は、生命の危険に向き合う緊張感の中、ときばきと処置して



いきます。

また、「壁新聞コンテスト」には加盟校43校中29校が参加しました。壁新聞は、自校の青少年赤十字活動をまとめたものです。例年は地域の祭や保育所、高齢者施設等での各校のボランティア活動の様子が数多く掲載されていました。しかしコロナ禍の現在、ボランティアの依頼は多くありません。今年度の壁新聞には、幼稚園や保育所とのオンラインでの交流の様子や募金活動の様子等、コロナ禍に向き合う今だからこそできた活動が取り上げられています。

「体験発表」の発表においても、現在の苦しい状況でできた活動について述べられており、部門すべての場面で今大会のテーマに沿った成果を発表できました。

(委員長 玉 館 香奈子)